PART2　基本構造（＝語順）

二　基本構造（＝「語順」）

① S（主語）＋V（述語）
（＊V部分は形容詞・形容動詞・名詞も置かれる）

② S＋V＋O〔目的語＝～**ヲ**〕

③ S＋V＋於・于・乎＋C〔補語＝～**ニ・ト・ヨリ（モ）**〕

④ S＋V＋O＋於・于・乎＋C
（＊名[1] 動[4]二 名[2]ヲ 於・于・乎 名[3]ニ一）

⑤ S＋V＋C＋O
（＊名[1] 動[4]二 名[2]ニ 名[3]ヲ一）

⑥ 修飾＋被修飾

＊ ①・⑥は日本語と語順が同じだが、②～⑤は異なる。そこで漢文を日本語の順番で読むために「返り点」をつける。

★ ①～⑤において、Sが省略される時もある。**→Vにあたる部分を探す。**

① S（主語）＋V（述語）　（＊V部分は形容詞・形容動詞・名詞も置かれる）

（例）伍員亡。（伍員は亡命した。）
　　汝狗猛。（お前の犬は気性が激しい。）
　　彼良医也。（彼は腕の良い医者である。）

② S＋V＋O〔目的語＝～ヲ〕

（例）病児服薬。（　　　　　　）

＊「～ヲ」の送り仮名を振って文意が通じなければ、OではなくC。

③ S＋V＋**於・于・乎**＋C〔補語＝～**ニ・ト・ヨリ（モ）**〕

（例）我請於帝。（　　　　　　）

（例）公語人曰…　（公が人に語って言うことには…）

＊V＝「言う」の意味になる時は、「S＋V＋C」となることが多い。

＊文意上「～ヲ」になる時は、CではなくO。強意の働き。

（例）伍員過於荊。（伍員は荊の国を通り過ぎる。）　注　荊…楚（国名）の異名。

④　S＋V＋O＋於・于・乎＋C

（＊　名[1]動[4]二名[2]ヲ 於・于・乎 名[3]ニ一）

（例）献不死之薬於荊王。（　　　　　　　　）

⑤　S＋V＋C＋O

（＊　名[1]動[4]二名[2]ニ名[3]ヲ一）

（例）子路与人一（いっ）箪（たんノ）食（し）。（　　　　　　　　）

注　一箪食…竹で作った器に盛った飯。

ここで再び**〈例題三〉**（左記）を見てみよう（選択肢①・③・④はカット）。

〈例題三〉「移二榻於戸外一而寝」を返り点に従って読み下すとどうなるか。最も適当なものを、次の中から一つ選べ。

＊榻…長椅子兼用の細長い寝台。

②　榻を戸外に移して寝ねたり

⑤　榻は戸外にて移して寝ねたり

S＋｛副詞／助動詞／再読文字／前置詞を含む句｝＋V＋O＋於・于・乎＋C＋語気詞

※前置詞を含む句

以(テ)二～(ヲ)一　／　与(と)二～一　／　為(ニ)二～一　／　自(より)二～一　など

※語気詞＝文末で強意・疑問・反語・詠嘆・断定などの気分を表す言葉

（例）　臣以二忠信一得二罪於上一者也(なり)。　（私は忠信でありながら「　　　　」ものである。）

→ 書き下し文

〔　　　　〕

注　上…上位の人。

第1講　PART2　確認問題

① 文の構造が他と異なるものとして最も適当なものを、次の中から選べ。

ア　我聞道。　イ　汝得人。
ウ　吾習之。　エ　子告之。

② 文の構造が他と異なるものとして最も適当なものを、次の中から選べ。

ア　士志㆓於道㆒　イ　吾読㆓家書㆒
ウ　子畏㆓於匡㆒　エ　我請㆓乎母㆒

③ 「天生徳於予。」の返り点のつけ方とその読み方として最も適当なものを、次の中から選べ。

ア　天生㆓徳於予㆒。　天徳に於いて予を生む。
イ　天生㆑徳㆓於予㆒。　天予に徳を生ぜり。
ウ　天生㆓徳於予㆒。　天徳を予に生ぜり。
エ　天生徳㆓於予㆒。　天生きる予の徳に。

④　「君子与宰相書。」を書き下し文にしたものとして最も適当なものを、次の中から選べ。

ア　君子宰相に書を与ふ。
イ　君子書に宰相を与ふ。
ウ　君子与ふ宰相は書けり。
エ　君子宰相と書を与ふ。

⑤　「王巾笥（わうきんし）シテ而蔵（をさ）二之廟堂（べうだう）之上一。」の傍線部を返り点に従って読み下したものとして最も適当なものを、次の中から選べ。

※巾笥…布で包んで箱の中に入れる。
　蔵…しまう。

ア　之と廟堂の上を蔵む。
イ　之が廟堂の上と蔵む。
ウ　之により廟堂の上こそ蔵む。
エ　之を廟堂の上に蔵む。

第１講　PART２　解答

二

②（病気の子が薬を飲む。）

③（私は帝にお願いする。）

④（不死の薬を荊王に献上する。）

⑤（子路は人に竹で作った器に盛った飯を与えた。）

（例）〔臣（は）忠信を以て罪を上に得る者なり。〕

（私は忠信でありながら**罪を上位の人に得る**ものである。）

第1講 PART2 確認問題 解答

〔解説〕

① ア〜ウは基本構文のうちの「S＋V＋O〔主語＋述語＋目的語〔＝〜ヲ〕〕」の構文であり、エは「S＋V＋C〔主語＋述語＋補語〔＝〜ニ・ト・ヨリ（モ）〕〕」の構文である。エの動詞は「言う」の意味になる「告」なので、「S＋V＋C」の構文となる。それぞれ、ア「我道を聞く。」、イ「汝（なんぢ）人を得る。」、ウ「吾（われ）之を習ふ。」、エ「子之に告ぐ。」となる。

② イは基本構文のうちの「S＋V＋O〔主語＋述語＋目的語〔＝〜ヲ〕〕」の構文であり、書き下し文にすると「吾家書を読む。」となる。その他は、基本構造のうちの「S＋V＋於・于・乎＋C〔主語＋述語＋補語〔＝〜ニ・ト・ヨリ（モ）〕〕」の構文である。それぞれ、ア「士道に志して、」、ウ「子匡（きょう）に畏（い）す。」、エ「我母に請ふ。」となる。

③ 「名＋動＋名＋於＋名」の構造に当てはまるため、「S＋V＋O＋於・于・乎＋C」の構文であることがわかる。「生」が動詞なので、その下の「徳於予」は「徳」が目的語（〜ヲ）、「予」が補語（〜ニ）となり、「予」から動詞である「生」に返って読むため、返り点は一・二点を使用する。

④ 「君子」＝名詞、「与」＝動詞、「宰相」＝名詞、「書」＝名詞なので、「S＋V＋C＋O」の構文であることがわかる。よって、「宰相書」の部分は「宰相」が補語（〜ニ）、「書」が目的語（〜ヲ）となる。

⑤　主語にあたる語は、傍線部の前にある「王(わう)」。文頭の「蔵」が動詞の意味で使われているので、傍線部は「動＋名＋名」の形。したがって「(S＋) V＋O＋C」か「(S＋) V＋C＋O」の構文。「之」を「廟堂(べうだう)之上」にしまう、と訳すると意味を理解できるので、「(S＋) V＋O＋C」だと判断する。したがって、「之」に「を」、「廟堂之上」に「に」を送ればよい。よって、エが正解。

〔解答〕

①　エ　②　イ　③　ウ　④　ア　⑤　エ